

早期古墳と葬儀用器台

石野博信

はじめに

早期古墳とは、2世紀末(従来の弥生後期末)の岡山県楯築遺跡の墳丘墓を古墳と認定し、3世紀初頭(庄内式期初頭)の奈良県纏向石塚古墳などを経て3世紀末(庄内式期末)の箸中山古墳(箸墓)にいたる期間とする(石野1988)。

葬儀用器台とは、弥生後期以来、集落内で使用されている日常的器台とは別に、埋葬儀礼用に制作・使用された器台である。かつて、近藤義郎・春成秀爾(1967)によって「特殊器台」と命名された一群の器台を含み、それをキビ型葬儀用器台として、同時に列島各地域に地域独自の〇〇型器台が存在することを提唱する。

他方、2・3世紀の列島各地域には葬儀用器台を使用しない大型墓が存在しており、それぞれの歴史的背景を検討する。

京都府下には、タンゴ型葬儀用器台をもつと推定されている径65メートルの大円墳である温江丸山古墳が存在する一方、同地域には葬儀用器台をもたない赤坂今井方形墓などが存在しており、それがタニハの中の地域性なのか年代差なのか否かを列島内の動向の中で検討する。

1. 葬儀用器台の地域型の設定

1) 日本海沿岸

イズモ・山持^{ざんもち}型 鳥根県出雲市山持遺跡資料を標識とする(今岡2005)。弥生後期と「後期末・古墳時代初頭の土器が河岸に廃棄もしくは置かれたような状況で多量に出土」した。木製品は「梯子、柱などをはじめとする建築部材のほか、農耕具、容器や腰掛など」がある。

河岸の包含層は上下2層あり、下層(弥生後期)の「包含層2からは小型特殊器台と特殊壺形土器、壺甕類、高坏、器台などがあり、器種ごとの出土量は甕が大半を占めている。上層(弥生後期末・古墳時代初頭)の「包含層1出土土器には壺甕類、高坏、器台のほか包含層2では見られなかった注口土器や低脚坏、搬入土器などがある。」(21頁)。

「包含層2では小型特殊器台が出土しているが、これは胎土や色調から吉備地方からの搬入品ではなく当地域で作られた模倣品の可能性が極めて高い。」「包含層1では西部瀬戸

内～北部九州系からの搬入品と考えられる壺形土器がみられ」る(128頁)。

「小型特殊器台は高さ35cm前後のもので、器台の基本的な形状は「ハ」の字状を呈する脚裾部に長く直立する筒部が付き、そこから大きく外反する受け部をつくり、その端部に上下に拡張した口縁部を貼り付けたものである」(128頁)。

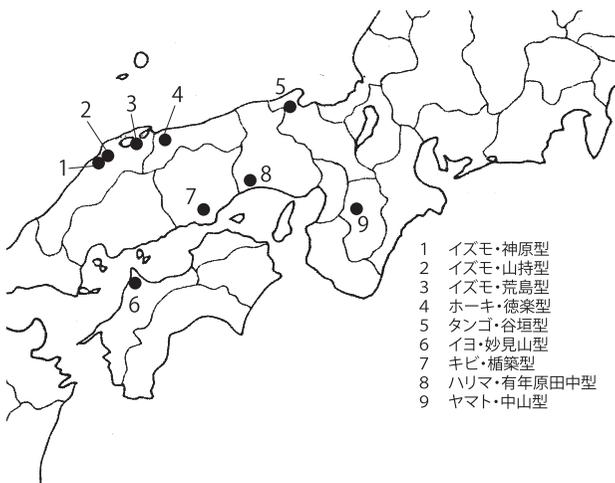
島根県内には出雲市西谷墳墓群や安来市カウカツE1号墳などからキビ型葬儀用器台の搬入品が10遺跡余から出土している一方、安来市宮山墳墓群や同、仲仙寺墳墓群にはそれが見られない。

イズモ・神原型と荒島型 イズモ・神原型は島根県雲南市神原神社古墳の「円筒土器」を標識とする(蓮岡ほか2002)。神原神社古墳は、「南北27～30m、東西22から26m」の不整形長方形墳で、幅1m余、長さ5.75mの竪穴石室をもつ。副葬品は、景初3年銘のある三角緑神獸鏡をはじめ鉄製素環頭大刀などがある。

円筒形土器や壺などは、竪穴石室の天井石を覆う土砂上に立て並べられ、「祭祀終了後、その場で打ち壊されたものと考えられ」ている(59頁)。

円筒形土器は「少なくとも14個以上ある」全形を復原できた個体は、「総高63.9cm、口径24.1cm、底径32.6cmで、――筒部は上半部に2本1組4条の沈線を施し、全体としては5段の区画を作っている。

神原神社古墳の円筒形土器は鋸齒紋を多用するものを含むことや、内面ヘラケズリは頸部・裾部付近を除けば垂直方向であるなど、荒島墳墓出土のものとは制作体系が異なる可能性がある。荒島古墳群の「大成古墳・造山1号墳・塩津山1号墳から出土したものは、羽状紋・竹管紋などの弥生時代以来の伝統的な紋様の使用、内面のヘラケズリは水平方向



第1図 葬儀用器台の分布

に行っており、製作技法は山陰の甌形土器などと共通した(赤澤1999) 伝統的な制作体系のなかにある」(211頁)。

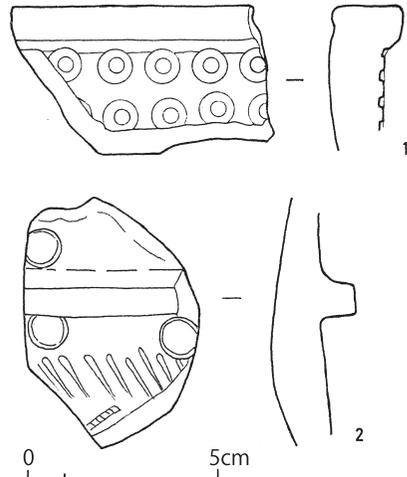
その上、「神原神社では埋葬儀礼終了後に石室天井石上に破碎し」ているのに対し、「荒島墳墓群では棺として使用された例が多」(211頁)い。

出雲には時期と地域ごとに山持型・荒島型・神原型が存在していた可能性があり、隣

接するホーキ・徳楽型と共に葬儀用器台が乱立する状況をみせている。

ホーキ・徳楽型 鳥取県大山町徳楽古墳の土器を標識とする。徳楽古墳は妻木晩田遺跡群の一面を占める一辺20メートルの方墳で、1932年に倉光清六によって出土土器が紹介されたが類例は山陰地域では増加していない。

ホーキ・徳楽型は大型の壺と器台に綾杉文と竹管文を主文様とする特色がある。その点では、機種構成は異なるが兵庫県姫路市の丁瓢塚古墳(岸本道昭2006)や奈良県桜井市纏向遺跡(石野1976)の出土土器と類似する。丁瓢塚古墳は3世紀末の全長100メートル余の長突円墳(前方後円墳)で、纏向例は纏向5類(布留1式)土器と共伴している。



第2図 ヤマト纏向のホーキ・徳楽型

タンゴ・谷垣型 京都府与謝野町谷垣遺跡の円筒形土器を標識とする(佐藤晃一1994)。円筒形土器は棺として転用されており、合計10本確認された。10本のうち8本までが下一段が欠けており、外面にはベンガラが塗られているが、残っていた下一段にはベンガラが塗られていないので本来は墳丘上に埋め込んで立てられていた、と推定されている。

円筒形土器は高さ130cmで口縁部は大型壺の複合口縁のようにつくり、胴部は3段で長方形スカシをもちい、口縁部には竹管文、胴部第一段目には綾杉文をめぐらす。近くには径65メートルの円墳・温江丸山古墳があり、本来の使用古墳として注目されている。

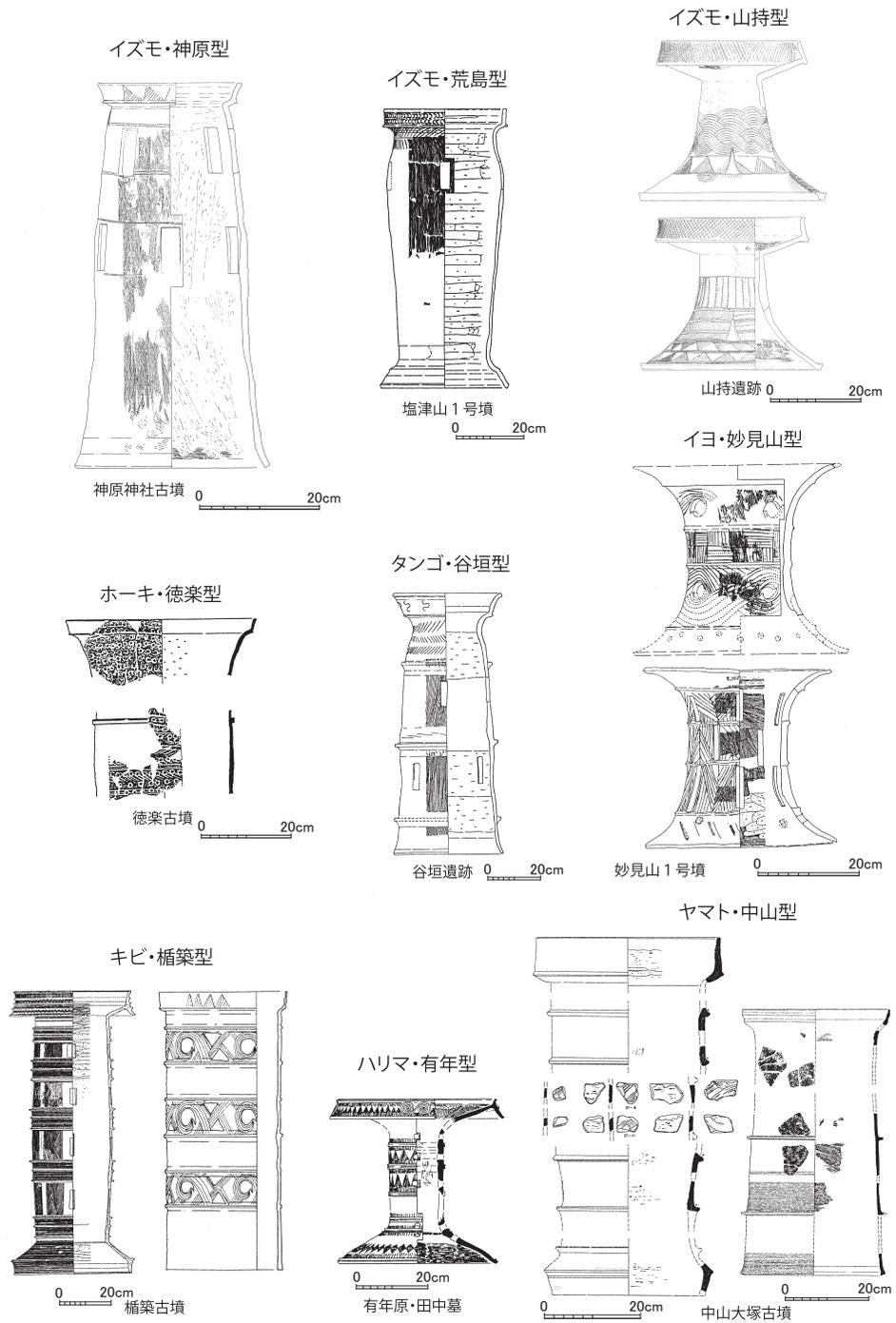
なお、タンゴ・谷垣型といっても、類例は丹後にはなく、ホーキ・徳楽型やイズモ・荒島型との関連が考えられる。

2) 瀬戸内沿岸

イヨ・妙見山型 愛媛県今治市妙見山古墳の土器を標識とする(下条2008)。妙見山古墳は瀬戸内海を望む高縄半島の先端にある全長55メートルの4世紀初の長突円墳である。

「器台は胴部中央で直立し、上下(口縁と底部)に開くシンプルな形態である。弥生時代に発生する大型器台は型式的特徴を素直に継承し、それを誇張したものである。器高は35~45cmで、口径は35~40cm、底径は40cm前後」である。器台には「突帯が4条巡らされ、全体は五段に区切られる」。胴部3段には長方形スカシがあり、各段には弧帯文や市松文や綾杉文などが施される。

イヨ・妙見山型は、弧帯文を刻む点でキビとの類縁が考えられるが、器形はイヨの弥生



第3図 葬儀用器台の分類

後期の大型器台の系譜上にあり、在地性が強い。

キビ・楯築型 岡山県倉敷市楯築古墳の器台を標識とする(近藤1992)。楯築古墳は2世紀末(従来の弥生後期末)の全長(推定)80メートルの中円双方墳である。円丘部中央の木槨・木棺を主たる埋葬施設とし、埋葬施設上に円礫堆がある。

「特殊器台は、円礫堆、北東突出部東側下方、円丘斜面第1列石下方などで約30個体分ほど出土しているが、全形がほぼ復元されたのは1個体である。——高さは112cm、口縁径・底径とも約46.5cm、エンタシスのようにふくらむ筒部中ほどの径33.5cmを測る。——(筒部には長方形スカシのある4段の文様帯があり)細い沈線による三連続杉文、複合斜線文などである—全体を総合すると、4ないし5型式に分類できるが、上記した復元品の型式がもっとも大形で手の込んだ品であることは間違いない」(116頁)。

近藤・春成1967年論文では、キビには弥生後期末から古墳前期にかけて、立坂型・向木見型・宮山型・都月型という4段階の「特殊器台」の展開が想定されており、楯築は立坂型に相当する。土器との共存関係では、立坂・楯築型は鬼川市3式=近畿弥生5式末で、都月型は近畿の布留1式に相当する。おそらく、2世紀末から3世紀末・4世紀初頭の約100年間にキビの「特殊器台」が推移したことになる。

この間、近畿の中山大塚古墳や箸中山古墳に宮山型と都月型が登場し、初期ヤマト政権とキビとの関係が注目されるようになった(後述)。

ハリマ・有年型 兵庫県赤穂市有年、原田中墳墓の土器を標識とする(宮崎・藤田1992)。原田中墳墓は径20メートルの円丘の一方に小張出部、他方に陸橋部をもつ2世紀末の円丘墓である。幅約5メートルの周溝内には多量の礫と土器が転落していて、本来は墳丘に葺石があり、葬儀用器台が立ち並んでいたことが推定できる。

器台は、口径48cm、底径45cm、高さ48cmで、口縁部・脚部・筒部にそれぞれ複合鋸歯文や列点文が施されている。周溝内には他に複合鋸歯文を主文様とする大型壺や高坏がある。

いづれも、弥生後期の伝統的器形と文様を継承・発展させた器種であり、地域性が強く、現段階では類例の拡がりはない。

ヤマト・中山型 奈良県天理市中山大塚古墳の器台群を標識とする(豊岡1996)。

「中山大塚古墳の墳頂部、および墳丘裾部から出土した土器・埴輪類の重要性は、宮山型特殊器台・都月型埴輪・円筒埴輪がともに検出されただけでなく、それらの間に使用位置・時間の差があることを確認したことにある。つまり、宮山型特殊器台が石室被覆石材上に破碎破棄されていたのに対し、都月型埴輪と円筒埴輪は、石室の埋設後の完成した墳頂に樹立されていたものである。宮山型と都月型とが同一古墳に使用されながら、葬祭

付表1 西日本の2・3世紀の大型墓と葬儀用器台

●長突円墳 □長突方墳 ●円墳 □方墳 ㄐ四突起方形墓 ㄑ中円双方墳

国名	墳墓・古墳	墳形	全長	葬器	鏡	刀剣	玉	時期(世紀)
ツクシ	平原1号	□	14					3前
	祇園山	□	23		○			3初
	津古正掛	●	33		○	○		3中
	那珂八幡	●	75		○			3末
イヨ	雉ノ尾	□	30					3後
	唐子台	●	30					3末
	朝日谷	●	30		○2			3末
	妙見山	●		○	○			4初
サヌキ	鶴尾4号	●	40		○			3末
	野田院	●	46					4初
	丸井	●	30		○			3末
アワ	足代東原	●	16.5					3末
	萩原1号	●			○			3末
	萩原2号	●			○			2末~3初
トヨ	下原	●	23					3末
	川部西1号	□	17					3末
	朝田Ⅱ区3号	□	16		○			4前
アキ	中小田1号	●	30		○			4前
	弘作1号	●	40		○			3末
	宇那木山2号	●	40		○			4初
キビ	榑築	●	80	○				2末
	宮山	●	38	○				3中
	矢藤治山	●	35.5	○	○			3中
ハリマ	有年原・田中	●	20	○				2末
	西条52号	●	25		○			3前
	横山7号	●	32					3後
	徳部山39号	●			○			3後
	井の端	□			○			3初
	岩見北山	□	23					3後
	権現山51号	ㄐ	48	○	○	○	○	4初
丁瓢塚	●	100	○				3末	
セツツ	天王山4号	□	19		○	○		2末
	西求女塚	□			○	○		4初
カワチ	森1号	●	106					3末
ヤマシロ	砂原山	●	25					2末?
ミノ	瑞竜寺山	□	46		○			2末
	象鼻山1号	□	40.4					4初
イセ	筒野1号	□	40		○			
	東峡(女牛谷4号)	□	40×20					
オハリ	廻間1号	□	25					2後
	西上免	□	40.5					2末
	東之宮	□	72		○11			3末
ミカハ	浪ノ上1号	□	17					2後
	二子	□	74					3末
スルガ	辻畑	□	59.5		○			3末
イズモ	仲仙寺9号	ㄐ	22~27					2後
	西谷3号	ㄐ	30×40	○				2後
	西谷4号	ㄐ	27×34	○				2後
	宮山4号	ㄐ	15×19					2後
	塩津1号	ㄐ	26×32	○				3後
神原神社	□	30	○				4前	
ホーキ	徳楽	□	19×19	○				4初
	西桂見	ㄐ	60?					3末
	阿弥大寺1号	ㄐ	21					2末
タニハ	大風呂南	□	25×30					2末
	赤坂今井	□	36×39					2末
	(温江丸山)	●	65	○(推定谷垣型)				4前
	黒田	●	40		○			3後

国名	墳墓・古墳	墳形	全長	葬器	鏡	刀剣	玉	時期(世紀)
オーミ	法勝寺	□	21					2末
	富波	□	42					3末
	小松	□	60		○			3中
	袖郷亀塚	□						
	熊野本6号	□	28					3末?
	熊野本12号	●	30					4初?
コシ	小羽山30号	□	27		○	○	○	2後
	南春日山1号	□	29 × 40					2末
	杉谷4号	□	25					4初
	一塚21号	□	18					3前
ヤマト	葛本弁天塚	●	40 ?	○				4初
	中山大塚	●	120	○				3後
	馬口山	●	110	○				4初
	西殿塚	●	230	○				4初
	ノムギ	□	63					3末
	フサギ	□	110					3末
	箸中山	●	280	○				3末
	下池山	□	125					4初
	纏向石塚	●	96					3初
	纏向矢塚	●	96					3末
	纏向勝山	●	120余					3初～3末
	ホケノ山	●	80					3中
	東田大塚	●	102					3末
メクリ1号	□	28.5					3後	

上の使用時間帯・場所において異なるものであることが判明した。宮山型は推定される器高が小さく、屈折した脚裾部の存在や長大な口縁部など、これまでに知られた同型式のなかでは古い様相を呈している。加えて製作に吉備地方の砂礫が用いられたと推定され、これまでに奈良盆地東南部で発見された宮山型が(大和)の砂礫を用いたと推定されることと異なっている。こうしたことからみて、今回の宮山型は奈良盆地東南部で最初に用いられた宮山型であると推定されるだけでなく、吉備地域の資料と比較しても最も古式なものである可能性がある。

また都月型埴輪と推定されるものはその全体像を復原するには至らなかったが、箸中山古墳採集品によって春成秀爾氏が復原したC類のように器高が小さく、紋様段が上下に連続したものである可能性がある。施紋された蕨手状紋様にも特徴があり、一般の都月型では巴透孔を右旋回した帯紋様が右下へ離れていくのに対し、本資料では右旋回した帯紋様が巴透孔の下へと巻き降りている。こうした蕨手状帯紋様の例は、やはり箸中山古墳採集品の中に知られるのみであり、その後の資料にはみられない。こうしたことから、今回の都月型埴輪と推定される資料もまた、都月型の中では極めて古式な段階のものと考えられる。

この都月型埴輪と胎土・制作技術が共通する普通円筒埴輪は、これまで知られたいずれの資料と比較しても最も古式なものである。その口縁部の仕様が庄内式土器の口縁部に類似することは、遺構や他の遺物の検討により、本古墳が布留式以前の所産と推定されるこ

とと齟齬がない。おそらく本資料を嚆矢として、奈良盆地東南部の前期古墳で円筒埴輪が展開していく過程こそ、埴輪祭祀成立期の姿として評価すべきものであろう。」(171・172頁)。

なお、ここでいうヤマト・中山型葬儀用器台とは、同一古墳での一連の葬送儀礼の中でほぼ同時に使用されている器台群をさす。つまり、従来の宮山型と都月型は、当初には年代差ではなく地域差であり、それが中山大塚古墳で共存していることを示す。さらに豊岡氏は、宮山型文様は大和の弥生中期土器文様(唐古鍵遺跡など)からたどれることを説明しており、その分布が近畿中心であることから宮山型の出自は近畿中部だと主張している(豊岡1985)。

従って、中山大塚古墳において宮山型は石室天井石直上で、都月型は墳丘上で、それぞれ使用されていることは、宮山型はヤマト一族、都月型はキビ一族によって、それぞれ供献された可能性が考えられる。ただし、中山大塚古墳石室上の宮山型は、キビの砂礫を含みキビ産とされている点は検討を要する。ヤマト・香久山の土を「大和の物実」として摂取しヤマトを征服したという神武伝承に類する背景が、かつて列島各地に存在していたのかもしれない。

2. 葬儀用器台の編年と分布

葬儀用器台は現在のところ、西はイズモ・イヨから東はヤマトまでの日本海と瀬戸内海の沿岸から出土している。

出現は弥生後期末で、キビ・楯築型、ハリマ・有年原田中型、イズモ・山持型は弥生後期の器台の形を継承しているが、立坂・楯築型は葬儀用器台として巨大化し、特殊化している。

付表2 葬儀用器台の消長と分布

型	時 期		地 域												
	弥生時代 後期	庄内	布留	イズ モ	ホー キ	イナ バ	タン ゴ	コシ	イヨ	キビ	ハリ マ	ヤマ ト	ヤマ シロ	オー ミ	ミノ
イズモ(山持)	●			—											
イズモ(神原)			●	—											
イズモ(塩津山1号・荒島)			●		—										
ホーキ			●								—				
タンゴ			●			●	—							●	
イヨ		●							—						
キビ	●	●	●					●		—	—	—	—	●	●
ハリマ	●										—				
ヤマト		●									—				

その上、楯築型はキビの中で向木見型・都月型と変遷しながらキビ全域に拡がり、さらにイズモ・西谷墳墓群やハリマ権現山51号墳からヤマト・中山大塚古墳をはじめとして、オオヤマト古墳群へと展開する。キビ型葬儀用器台の分布は近畿にとどまるが、付されている特殊文様は滋賀県東近江市入江内湖遺跡や石川県金沢市畝田遺跡、岐阜県大垣市荒屋南遺跡など北陸から東海への拡がりをみせる。

他方、イヨ・妙見山型は、弥生後期の伝統的器形をもちながら弧帯文系文様と勾玉形スカシをもち、地域性と外来要素を融合させている。

3. 葬儀用器台と大型墳丘墓

2世紀末、キビ・楯築型は全長80メートルの中円双方墳に突如、登場し、その後、宮山古墳(全長38メートル)や浦間茶白山古墳(全長130メートル余)などの長突円墳に使用されると共に総社市伊与部山方形墓(10×13.5メートル)や真庭市中山土壙墓群などの小型墳にも拡散する。

しかしキビ以外の地域では葬儀用器台の使用状況は不安定であり、地域ごとに検討しよう。

1) イズモ・ホーキ・イナバ＝(仮称)イズモ世界

イズモ世界には弥生後期末に地域色の強い山持型とキビ系の楯築型が併存する。山持型は集落内祭祀に、楯築型は西谷3・4号墓号墳(長辺30～40メートル)などの大型墓の葬儀に使用されていた。しかし、若干先行するホーキ・阿弥大寺1号墳(長辺21メートル)やほぼ同時のイズモ仲仙寺9・10号墳(長辺22～27メートル)には使用されていないし、イナバ最大の西桂見墳墓(長辺60メートル)にも認められていない。

見方を変えると、2世紀のイズモ世界は基本的には葬儀用器台をもたない地域であり、一部、イズモ西部の西各墳墓群の首長墓にだけ、キビの葬儀用器台が採用された、と言える。

それが3世紀末・4世紀初頭になるとホーキ・徳楽墓やイズモ・神原墓や塩津山1号墓に円筒形土器ともよばれる葬儀用器台が現われる。

とくに、ホーキ・徳楽型はイズモ世界での類例は少ないが、3世紀末の播磨の王墓である丁瓢塚古墳(全長100メートル余、長突円墳)に登場すると共に、類例はタンゴ・谷垣型に及ぶ。

2) タンタンサ(但馬・丹波・丹後・若狭)

タンゴ・谷垣型は4世紀に棺に転用されていたが、本来は近接の温江丸山古墳(径65メートルの円墳)に樹立されていた、と推定されている。

タンタンサ地域には2世紀(弥生後期後半)に赤坂今井墓(36×39メートル)や大風呂南墓

(約25×30メートル)などの大型方形墓があるが葬儀用器台出現以前の可能性がある。しかし、2世紀末～3世紀には数多くの台状墓群があり、中には青龍3年銘鐘をもつタンゴ・大田南5号墓や景初4年銘鏡をもつタンバ広峯15号墳(全長40メートル、長突円墳)など邪馬台国時代の対外貿易に従事した集団の存在が考えられるが葬儀用器台は採用していない。

3) イヨ・キビ・ハリマ

キビの葬儀用器台出土遺跡(古墳)は60ヶ所を上まわり、中でもキビ南部の墳墓出土数は28基でほぼ半数を占める(宇垣2003)。中でも2世紀末～3世紀末のキビ・楯築型以降、向木見型・宮山型・都月型の各類型が東方のヤマト・ヤマシロの大型古墳に波及するが、近接するアキ・サヌキ・アワには伝播せず、ハリマも一古墳(権現山51号墳)にとどまる。とくに、サヌキの鶴尾神社古墳や奥古墳群、ハリマの養久山古墳群など3世紀を含む調査済の古墳が多いにもかかわらず、葬儀用器台は認められない。

4) ヤマト・ヤマシロ

ヤマトのオオヤマト古墳集団には中山大塚古墳をはじめとして、中山大塚古墳、馬口山古墳、箸中山古墳(箸墓)などにキビ型葬儀用器台が使用されている。その初現は、3世紀初頭の纏向石塚古墳の組帯文円板(旧称、弧文円板)の特殊文様にあり、布留1式期の辻旧河道内の2片の都月型に至る。

箸中山古墳には全長280メートル長突円墳として3世紀末・ヤマト政権初代の大王墓であり、纏向石塚古墳はそれに先行する。つまり、初代ヤマトの大王が活動している時からヤマトとキビの間に葬祭を共用する関係が成立していたのである。

しかし、オオヤマト古墳集団内の他の大型古墳、例えば、纏向古墳群内の勝山古墳・矢塚古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳や北群のノムギ古墳・マバカ古墳など、数度の墳丘周辺を調査済の古墳で葬儀用器台は出土していない。

オオヤマト古墳集団には3・4世紀の長突円墳が26基あり、うち12基が墳丘周辺調査済で、そのうち4基だけが葬儀用器台をもつ。さきにあげたように、箸中山古墳や西殿塚古墳(全長220メートル)などの大王墓級の古墳に葬儀用器台が採用されているため、初期ヤマト政権とキビとの関係が注目されているが、全長120メートル級の政権中枢になう一族にはキビ型葬祭はさほど浸透していないことを示している。

5) ツクシ(筑紫)とコシ(越)とノウビセイゾウ(濃・尾・勢・三)

ツクシ・コシ・ミノ・オワリ・イセ・ミカワには、それぞれ2・3世紀の大型墓は存在しているが、地域色の強い独自の葬儀用器台も生まれていないし、他の地域出自の葬儀用器台も採用していない地域として注目する必要がある。各地域の2・3世紀の主要な墳墓

をあげれば、付表1のとおりである。

葬儀用器台をもたない東海以西の各地域にも、それぞれ地域色豊かな3世紀代の大型墓が存在する。

墳形はツクシを除いて方形墓の世界であり、規模も100メートルをこえない(付表1)。

ツクシには、3世紀前半に一辺14メートルといった小型方形墓で銅鏡40面もつ平原1号墳が顕著で、墳丘の大型化をめざさない。それが、3世紀末の那珂八幡古墳では全長75メートルの長突円墳を築造し、2次埋葬で三角縁神獸鏡を副葬する。

瀬戸内西部にも全長30メートルをこえる墳丘墓はない。イヨには長突円墳の唐子台15号墓と長突方墳の雉之尾古墳が併存するが両者とも全長30メートルでとどまるが、ツクシ同様に3世紀末には全長55.2メートルの妙見山1号墳が登場する。

キビ・楯築型をもつ瀬戸内中部の状況は特異である。2世紀末に全長80メートルの楯築中円双方墳が突然出現し、全長40メートル前後へ長突円墳級である宮山古墳や矢藤治山古墳へと継続する。しかし、キビ・楯築型葬儀用器台は、播磨西部のたつの市権現山51号墳以外には拡散せず、ハリマ・サヌキ・アワの地域には祭祀同盟としては伝播しなかった。もちろん、サヌキには全長40メートル代の長突円墳である鶴尾神社4号墳や野田院古墳などが存在しているにもかかわらず、である。

ハリマには3世紀末に全長100メートルでヤマト箸中山古墳と同設計の丁瓢塚古墳が登場するが、墳丘上で採取される土器片はすべて山陰系のみで、キビ系もヤマト系も全くない。

4. キビ・楯築型葬儀用器台の動向

2世紀末、キビ中部に突然、キビ・楯築型葬儀用器台が登場し、直ちにイズモ西谷墳墓群に伝播する。キビ中部とイズモ西部、言いかえれば、楯築王と西谷王との間に祭祀同盟が締結されたのではないか。しかし、キビは突出部付き円丘墓(長突円墳)、イズモは四隅突出部型方丘墓を保持しつづけ、お互いに墳墓形態を混合させることはなかった。

ヤマトへは、楯築古墳に誕生した突出部付円丘墓はもちこむが、葬儀用器台は入れず、同器台に使用した特殊文様を象徴とする“思想”を入植したのではないか。逆に言えば、ヤマトは政治的シンボルとしての墳形と思想を導入したが、葬送儀礼体系は拒否したのかもしれない。

しかし、旧宮山型=ヤマト・中山型段階になると、キビ・宮山古墳とヤマト・中山大塚古墳の間、つまり、宮山王と中山王の間に葬儀用器台を共有する祭祀同盟が成立したらしい。

そして列島最初の大王墓である箸中山古墳(箸墓)に、中山大塚古墳に採用された宮山型・中山型と都月型葬儀用器台が共に登場する。中山大塚古墳で、石室天井石上に宮山型、墳丘に都月型が使用されたように、箸中山古墳でも円丘部に宮山型、方丘部に都月型が使い分けられているのは、両者の葬送儀礼の継続を思わせる。

このように、3世紀末になると、ヤマトは政治も葬祭もキビ型とヤマト型を融合し、新ヤマト型を成立させ、その象徴が箸中山古墳の誕生であった。

しかし、その後、4世紀前半から中葉にかけて築造された行燈山古墳(全長220メートル、伝・崇神陵)と渋谷向山古墳(全長300メートル、伝・景行陵)の両大王墓には葬儀用器台はなく、2世紀末から続いたキビ主導の政治・祭祀体制は終熄した。

ヤマトにおける4世紀前半の新たな体制は列島各地に及び、各地域型の葬儀用器台は消滅へと向う。しかし、イズモ・ホーキ・タンゴなど日本海沿岸のクニグニでは4世紀にも継続し、ヤマト纏向遺跡の辻旧河道で布留1式と共伴している2点のホーキ型葬儀用器台が象徴しているように、ヤマト政権中枢地にも残映として残る。

4世紀にヤマトに移住してきたホーキかタンゴの人々の墳墓が、纏向地域のどこかに残されているのかもしれない。

(いしの・ひろのぶ=当調査研究センター理事・兵庫県立考古博物館長)

〔引用文献〕

- 赤澤秀則 1999 「出雲地方前期古墳の系譜と階層性」『田中義昭先生退官記念論文集地域にねぎして』
同記念事業会
- 石野博信 1976 『纏向』 桜井市教育委員会
- 石野博信 1988 「文化の十字路近畿」『図説検証原像日本』 3・53頁、旺文社
- 今岡一三 2005 『山持遺跡Ⅰ』 鳥根県教育委員会
- 岸本道昭 2006 「播磨の集落と初期古墳」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』 香芝市二上山
博物館
- 倉光清六 1932 「古墳発見の伯耆弥生式土器」上・下 『考古学』 3-4・7
- 近藤義郎・春成秀爾 1967 「埴輪の起源」『考古学研究』 13-3
- 近藤義郎ほか 1992 『楯築弥生墳丘墓の研究』 楯築刊行会
- 下條信行ほか 2008 『愛媛県今治市大西町妙見山1号墳-西部瀬戸内における初期前方後円墳の研究-』
今治市教育委員会
- 豊岡卓之 1985 「弧帯文の性格とその分布」『考古学と移住・移動』 同志社大学考古学資料室
- 豊岡卓之ほか 1996 『中山大塚古墳』 奈良県立橿原考古学研究所
- 蓮岡法暲ほか 2002 『神原神社古墳』 加茂町教育委員会
- 宮崎素一・藤田忠彦 1992 『有年原・田中遺跡』 赤穂市教育委員会